

日本の「罪」と反日感情

樋口 淳

僕には恋人がいたが 彼女の面前

いわれなき罪を暴かれてしまったのであった

証言台に立った彼女はいった

「私はあなたを愛しているわ だけど罪は罪だと思うの」と

(大槻ケンヂ詩集『リンウッド・テラスの心霊写真』より)

ぼくたちの暮らす国際社会では、個人とおなじく国家もまた「とりかえしのつかぬ罪」を犯すことがある。これは、とつてもややこしい。とくに「うっかり日本人に生まれてしまった罪」などという、とんでもないものが控えているからである。「それはですね。ぼくが生まれる前のことでした」とか、「ぼくは、じつは反対したのですが」などといつても、赦してもらえない。「とにかく日本がワルイ。きみは日本人である。だから、きみはワルイ」という、不可避の三段論法が待っている。

そして、日本人にとってそのサイタルモノの一つが「韓国・朝鮮にたいする罪」である。この罪は「それは、親のやったことだから知らない」とか、「とりあえず日本人であることは棚にあげて、人間として解決しよう」とか、「日本人なんだから、日本人のやったことは全部引き受けましょう」とか、これまたいろんな姿勢があつてやっかいだが、とにかく罪は罪なのだ。私見によれば、この罪には大きく三つの層があり、重なりあつている。

まず第一は、ヨーロッパに端を発した近代化のビッグ・ウェーブがアジアにおし寄せたとき、なんとかその危機を自前で切り抜けた日本が、よせばいいのに韓国・朝鮮にまで出かけていつて、日本流の近代化を勝手に押しつけ、推進したこと。これが、罪の最下層である。

第二は、第二次世界大戦の終末期に、あのロシアが南下し、アメリカがそれを食い止めようとした時、なぜかその勢力の境目が38度線におちついてしまい、韓国・朝鮮が分断国家になってしまったこと。これが、罪の第二層である。

三つ目は、分断の帰結として朝鮮戦争がはじまり、半島が南北に分かれて塗炭の苦しみをなめた時、日本は軍事特需をうけて経済成長の波にのり、今日の経済的な発展の基礎を築いてしまったこと。これが、罪の第三層である。

いま、この三つの問題について、少し立ち入つて考えてみたいと思う。

まず第一の問題。日本の知識人のなかには「1910年にはじまる日韓併合の時代に、日本のした

ことは、悪いことばかりではない」という人が少なくない。たとえば、日本は鉄道を敷き、道路をつくり、橋をかけ、河川の改修工事をし、治水につとめ、韓国近代化の下部構造のほとんど全てを用意した。学校をつくり、病院をたて、警察・裁判制度を整備し、政治の仕組みや官僚制度も近代化した。工場をつくり、銀行をたて、商業をおこし、町をつくった。稲をはじめとする農作物の品種改良をし、肥料をほどこし、商品作物を導入し、農村の生活を合理的なものとした。とにかく、なんでもやったのである。

しかも、その事業を追求したのは、ごく普通の日本人であり、よく映画にでてくる憎々しい帝国軍人ばかりではない。長野あたりの僻村からでていった「真面目な」鉄道員だったり、「進歩的で有能な」官僚であったりする。彼らの多くは、韓国の町や村で愛され、尊敬されていた。いまでも聞き取り調査をすれば、「村の学校のあの先生は偉かった」とか、「あの駐在さんは親切だった」とかいう話にはいくらでも出会う。もちろん今日、韓国のテレビによく登場する吝嗇で、小心で、卑しくて、嘘つきで、権力欲が強く、なぜかいつも好色な日本人は、きっといたに違いないが、むしろ例外だったろう。

さらに、この日帝時代の一般ピープルは、敗戦の情報もろくに知らされず、引き上げにあたっては、めちゃくちゃ苦労した。ズデーデン地方を引き上げるドイツ人と同じ苦しみを味わった日本人も少なくない。

こうした事実をまず認めよう。そして、その上で「なおかつ日本の犯した罪は赦しがたい」のである。日本人は、してはならないことをした。韓国・朝鮮の近代化は、まず韓国・朝鮮人の手でなしとげられなければならなかったのである。もちろん、あの時、日本が介入しなければ、ロシアや中国がもっとひどいことをしたかもしれない。帝国主義と植民地主義の時代に、ヨーロッパの列強と呼ばれる国々が、アジアやアフリカや南アメリカでしたことは、もっとずっと狡猾で、残虐で、冷酷だった。今日、世界の各地に引き起こされる紛争の数々のなかで、彼らの仕業が絡まぬものはない。

近代化のもたらした罪の元凶であるヨーロッパが、一度も罪を認め、謝罪しないのに、なぜ日本だけが、罪を認める必要があるのか。

こうした居直りは、恥ずかしい。

韓国・朝鮮の人々は、自分の手で、鉄道を敷き、道路をつくり、橋をかけ、河川の改修工事をし、治水につとめることができた。学校をつくり、病院をたて、警察・裁判制度を整備し、政治の仕組みや官僚制度も近代化したかった。工場をつくり、銀行をたて、商業をおこし、町をつくるはずだった。稲や農作物の品種改良をし、肥料をほどこし、商品作物を導入し、農村の生活を合理的なものとするに生涯をささげるはずだった。ところが、いきなり割り込んできた日本人が、勝手にやってしまったのである。それはないぜ、セニョール。

なるほど日本式経営は、いまや世界に冠たるものだし、アメリカ・ヨーロッパの近代化や個人主義に抵抗するうえで有効な武器だったかもしれないが、それを押しつけられ、自国の言葉を奪われ、最後には名前すら変えなさいといわれたらどうしますか。キリスト教徒でもなんでもないアフリカ人が、ポールとかマリーなんて呼ばれるのも気の毒な話だが、族譜の国の創氏改名は、それに劣らぬ、おそろしい文化破壊だった。

その帰結が、現在におよぶのだが、そのまえに第二の問題に移ろう。

あの八月、ロシアがいきなり南下し、満州と韓国・朝鮮から日本を駆逐したとき、いわゆる「抑留」や「引き上げ」の過程で、日本人はさまざまな悲劇を味わった。しかし、アメリカが純粋に戦略的にその流れを食い止めようとした時、なぜか境界は北緯38度におちついてしまった。

これは、同じ第二次大戦の敗戦国であるドイツが東西に分断されたのと大きな違いである。戦争を起こした当事者が、責任を問われて国を二つに割られるのは、ある意味でしかたがない。しかし、韓国・朝鮮は、戦争の被害者ではあっても、当事者責任を問われるいわれはない。もちろん、日本だって領土は失った。韓国・朝鮮や満州、台湾という植民地支配の地だけではなく、千島、樺太はいうにおよばず、一時は沖縄すら日本でなくなってしまった。だが、分断国家の悲劇を痛切に経験することはなかった。

自分たちの国が、たとえば箱根を境にして、北が共産主義で、南が資本主義になってしまって、ベルリンの壁ならぬフォッサマグマの壁なんかが登場したり、南北非武装地帯ができたり、北がいきなり攻め込んできて、南北離散家族がいたところに見られる状態が発生していたらどうだろう。

これは、ごく普通に起こりえたはずの話である。たとえば、山梨県生まれの僕は、静岡県にたくさんのおおやの親戚がいる。僕の家族や親族が、ある日とつぜん二つの違った体制のもとに住むことになり、たがいに「壁や非武装地帯のむこう側の同胞を解放する」という目的を与えられて、せっせとミサイルをつくったり、潜水艦で侵入したりする。三年も四年も兵役を強制されたりする。

日本であれば、これは漫画か、ビデオ・ゲームの世界である。だが、自分たち自身の責任を問うのが難しいのに、こうした現実を生きている人たちがいる。

また、こんな日常的現実もある。韓国の男子大学生の多くは、大学の二年を終えたころ、兵役にでかける。三年近くたって学校にもどると、もう前に勉強したことなんか大概わすれているので、一からやりなおす。あるいはまた、二年生までは勉強したって無駄だから、最初の二年間は遊んで暮らす。

反体制運動のデモが激しく、体制を変革する力をもちえていた時も、昨日までデモに参加し、

機動隊にむかって火炎ビンをなげていたのに、今日軍隊に入隊すれば、明日はデモ隊にむかって催涙弾をうちこむことになる。

だから、大学の二年生と三年生では、意識がまったく違う。こうした経験を、韓国の大人たちの多くは生きてきた。体制と戦いながら、体制の手足となるという二律背反を、好むと好まざるとにかかわらず味わってしまったのである。

韓国・朝鮮の友人から「日本は、半島の分断を経済支配の道具にしているのではないか」と、問われると初めは当惑する。だが、この事実を考えると、あらためて罪の深さに愕然とする。それが、第三の層である。

第二次世界大戦がおわった時、日本は、いわゆる先進諸国のうち一番最初に植民地を整理して、スリムになった。戦後の経済発展のために必要なリストラを、思いもかけずなしとげてしまったのである。そこに、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争がはじまり、ライバル諸国が、むだに人と金をつぎこんでいる間に、せっせと金をかせぎ、設備投資をして、若い技術者やビジネスマンを育てて、経済戦争を制した。

まあ、この勝利は東の間のものであり、「日イヅル国が、日ボッスル国になる」のは時間の問題らしいが、現在の日本の繁栄は、客観的事実ではないか。

その繁栄を生きる日本人は、韓国の抱える膨大な対日赤字や、北朝鮮の赤字以前の経済危機をどう考えるだろうか。

やはり、韓国・朝鮮の友人が口にする批判の一つに、「日本は技術移転に積極的でない」というのがある。たとえば、韓国の自動車問題。

ソウルの大渋滞を一度経験してみればわかるが、そこに走っている車のほとんどが、日本車のライセンス生産である。現代、起亜、大宇。韓国の自動車生産の能力は高いが、どこも日本の自動車メーカーと提携している。マツダ、三菱、ホンダ。

そしていま、三星が、ニッサンと提携して市場参入する。大きな国内需要をかかえ、すぐれた生産技術はあるが、誰の目にもあきらかな供給過剰が予測される。さらに既存の三大メーカーは、きわめて閉鎖的であるから、韓国内の優秀な下請け企業は系列にすべて囲いこまれている。いきおい三星は、すべてを日本から学ばなければならない。

しかし、日本のニッサン系列の下請けメーカーは、すべてを教えることはできない。技術力が高く、人件費の安い韓国に、ある部品製造のノウハウを教えてしまえば、明日からでも同じ部品が世界市場に氾濫して、日本メーカーは立往生してしまうだろう。そうでなくとも強力なライバルを身近につくってしまうことになる。

日本の自動車メーカーと部品メーカーの関係は、韓国ほど閉鎖的ではないから、品質がよく、安価であれば、親会社ですら韓国産部品をすぐに輸入する危険性がある。

だから、どんな小さな部品の製造にも、技術供与の契約が不可欠なのだ。しかし、三星の技術者にしてみれば、そんな細かいことに一々気をつかってはいられない。親会社のニッサンと契約したのだから、下請けが技術を供与しないのは不当だということになる。最初は、契約があろうがあるまいが、あるモデルを作るのに必要な技術は何でも教えなさい、という大きな態度。韓国の親会社と下請けの関係を日本でもやってみようとする。しかし、それに失敗すると、契約を逸脱して何でも学んでしまおうと実力行使にでる。これには、みんな辟易する。

ぼくたちは、みな幸か不幸か資本主義的市場原理の一円支配のもとに暮らしている。この原理の支配する社会では、韓国の望むような「適切な技術移転」などは、出来るはずがない。日帝による植民地支配と、国家の分断という逆境を克服した、今日の韓国は、みずからの手で構造改革を行い、資本主義的な競争力を成熟したかたちで身につけてゆくべきである。少数の大企業が系列の下請けを支配し、コンピュータも食品も自動車も薬も住宅も、すべて独占的に生産する現体制をあらためて、技術開発力を有し、大企業の支配力から相対的に独立した中堅企業をやしなうことである。

しかし、それにもかかわらず「分断国家」の問題が残る。

韓国・朝鮮側の「これまでの日本経済は、韓国・朝鮮の分断状況を十分に利用して経済的影響力を強めてきた」という認識。この認識は、正しい。

歴史に「もしも」はないが、「もし、韓国・朝鮮が分断されなかったら」あるいは「日本が、南北に分断されていたら」、今日までの日本経済の圧倒的優位はなかっただろう。たとえ、あったとしてもまったく別の展開をとっていたはずである。

そしてさらに、「今日の、あるいは今後の日本経済は、韓国・朝鮮の分断状況を十分に利用しながら、経済的影響力を強めようとする」という懸念がある。

今後、何年かのあいだに半島の南と北が統一されれば、韓国と北朝鮮は、ドイツが経験したのとは比べものにならないような深刻な事態を経験することになるだろう。それは、もちろん一時的なものであろうし、またどのような痛みをとまなおうと是非とも通らねばならない過程である。しかし、その時、日本はどう動くのか。また、統一までの過程で日本は、どのような役割を果たすのか。

韓国・朝鮮の側からは、「南北分断の現状は、日本経済にとって好都合である」とみえる。かといって、南北統一による経済的混乱も、日本経済にとってはビジネス・チャンスである。そんなことは、ぼくたち日本の一般ピープルには想像もつかないが、韓国・朝鮮、とくに韓国の市民にとっては常識中の常識なのだと思う。

技術移転問題が引き起こす経済摩擦も、こうしたコンテクストのなかで考え直さなければならぬ。

現在の韓国テレビの歴史ドラマのなかで執拗に繰り返される「ごさかしく、あざとく、ずるく、残酷で、欲深く、小心な」日本人像の背景は、過去よりも「いま・ここ」に、そして「これから」にある。韓国人が解くことのできないジレンマを、日本人は高見から俯瞰し、どちらに転んでも利益をさらっていくように見える。これが、赦しがたいのだ。

さて、以上の三つの層は、三食アイスのように均等に重なりあっているわけではない。むしろ、イチゴ・ミルク的に、基礎につめたい氷があり、そこにイチゴ・シロップが加わり、さらにコンデンス・ミルクがかかるとイメージにちかい。溶けはじめたいまとなっては、どこが氷で、シロップで、ミルクかというのは判然としないのである。

また、個々の日本人は、この罪をいかに引き受けるべきなのか。さらに、それをいかに解くべきか？ とても難しい。

この問題を、根源的に、原理的に引き受けたり、解決したりするには、とても力が及ばないので、ここでは日本の歴史教育という一つの具体的なトピックについて、私見をのべるに止めたい。そのためにまず、かつて人文研の月報に「日本と韓国のポスト・モダン」という文章を載せたときに紹介した、ぼく自身の経験について語りたい。

それは一九九五年の春のことだ。

語学研修の引率でフランスのプレストにいった時、同じ学校で若い韓国人の学生グループが勉強していた。大学在学中に私費で外国に長期滞在する。ちょっとまえの韓国では考えられないことである。

彼らと雑談したり遠足にいたりして、少し親しくなった時、一人の女子学生がこういった。日本人は「歴史を勉強しないだろう」「日本人は嘘つきだ」。たどたどしいフランス語だったので、歯に衣きせぬ言葉がじつに直截に響いた。

ぼくは、その時、彼女よりも多少言葉が自由であることも手伝って、(さらには教師特有の「教えてあげましょう意識」も手伝って)、日本の歴史教育の不備を語るとともに、彼女の誤解もただそうとした。

たしかに、日本の検定制度は姑息である。しかし、教科書ばかりが歴史認識のすべてじゃない。現在の日本人は、韓国人が思うよりもはるかに日韓の歴史について情報をもっている。学ぼうと思えば、いくらでも材料はある。大学にも、カルチャー・センターにも、授業があるし、現に、ぼくのようなアマチュアだって、何年かかけて学生と日帝時代を学んだことはある。

それに比べて、韓国人は日本について情報不足である。日本の検定教科書もすごいけど、韓国の教科書もすごい。あまりにも、ステレオ・タイプすぎないか。もうすこし、日本の現実を見てほしい。

こんなことを話したように思う。

だが、考えてみれば、歴史研究者ならまだしも、彼らのように受験勉強で韓国近代史をならう学生に、こんな話は酷だった。韓国の情報鎖国と、反日イデオロギーの操作について批判するまえに、やはり日本の歴史教育の「偏向」について語るべきであった。それも、たんなるお詫びや反省ではなく、具体的な実践の課題として。反省だけなら、サルでもできるのだ。

シロウトのぼくからすれば、日本の学校教育の日本史は、ほとんど国史の域をでない。日本および日本人の一体性を通時的・共時的に確認するという、きわめて強いイデオロギーに支えられている。たいていの学生は、小・中・高の学校教育で三度も繰り返して、日本の歴史を学ぶ。縄文・弥生から大化の改新などの諸改革をへて整備された国とその民は、明治初期にいたるまで、ほとんど国境をかえず、日本人という単一民族によって営まれてきた、と教えられる。よい意味でもわるい意味でも、日本が外の世界と直面する近・現代は、長い日本史のうちの短いエピソードにすぎない。さらに、この時代は評価が未確定であるなどという口実のもとに、大学の受験問題では敬遠される。

だから、近代植民地支配についての日本の受験常識では、せいぜい三一運動と義兵について学び、金玉均や安重根くらいをチェックしておけばよかった。ところが、韓国では、日帝ぬきに近代史を語れない。しかも、近代史教育の比重は、やたらと重いのである。

日本人が、本気で歴史教育を変えようと思っているなら、ごく簡単なことが一つある。小学校、中学校、高等学校と三度つづけて通史を教えることをやめて、高校あたりでは一度、近・現代史をゆっくり勉強する機会をつくればよいのである。それも、内側に閉じこもって、自分のアイデンティティを確立することに汲々とするのをやめて、世界の中の日本について考えてみたらよいのである。

もちろん、一度に立派な歴史教育のプログラムはできないから、ゆっくり教育と研究を積み重ねていけばいい。まず、その手始めに大学の受験科目に「近・現代日本史」というのを入れればいいのだ。最初は中身がともなわなくても、形を変えれば、そのうち中身はついてくる。

自分たちの国の政治や官僚制度の近代化についても学び、経済や商業の歩みを知るだけではなく、よその国まで出かけて行って「近代化」に精を出し、鉄道を敷き、道路をつくり、橋をかけ、河川の改修工事をした事の意味を知るべきである。そして、自分たちの国の「近代化」のために強制連行されてきた隣人たちが、どのような辛酸をなめたか学ぶといい。日本のあの橋も、あの道路も、あの工場も、日本人の手だけによって出来上がったものではないことが、時間をかければ分かってくるのではないだろうか。

さらに、これも提案だが、日韓の近代史を「日韓併合」からのみ語らずに、両国の近代化の歩みをもう少し長いスパンで捉えなおしてみる努力も必要である。

圧倒的に優位なヨーロッパ・アメリカ近代が、東アジアに帝国主義とともにやってきたとき、日本と韓国はこれにどう対処したか。日本は、その間、明治維新を体験し、日清・日露の戦いを、中国・ロシアと戦わねばならなかったが、つねにその中心には韓国・朝鮮問題があった。その間に引き起こされたさまざまな軋轢を、閔妃虐殺をもふくめて、学びなおす機会があってしかるべきである。

こうした学習は、さらに遡って近代を準備した近世の比較研究にも及ばねばなるまい。江戸時代といえば、朝鮮通信使による「日朝友好の時代」というステレオ・タイプをいいかげんにやめて、もう少し現実的な両国近世の構造比較をおこない、近代史の共通認識の幅を広げたい。さもないと、「日本と韓国は、古代以来友好関係にあった。ただ、壬申倭乱（文禄・慶長の役）と日韓併合だけが例外だった」という話になり、どうして壬申倭乱や日韓併合がおこったのかという話になると、皆目見当がつかないという情けない話になる。慰安婦問題の話になると、ひたすら反省するのに、テレビの大河ドラマでは、秀吉が繰り返しヒーローとして登場する。伊藤博文の肖像が、高額紙幣につかわれる。

エピソードだけで歴史を理解し、ドラマの主人公でも演じるように謝罪を重ねるのは、いかなものだろうか。

過去は、いつも現在に根をおろしている。

多くの韓国人にとって、日本は鏡の中の国である。表向きは日本文化の移入を拒否していても、町には日本のファッションがごく普通にみられ、テレビやコミック誌には「ドラゴン・ボール」「スラムダンク」などのリメイクがあふれかえっている。新聞・テレビの報道番組にも日本は、頻繁に登場する。アメリカが風邪をひけば、日本も風邪をひくといった日本経済やジャーナリズムの病ほどではないが、日本は韓国にとって無関心ではいられない、しかし容易に手の届かない国である。覗くと、自分の過去と現在が映しだされる、冷たいガラスごしの国なのだ。

1945年8月15日の光復の日以前に、そして以後に日本が韓国・朝鮮になにをしてきたのか、その事実を慎重に学びなおしたい。過去について謝罪するのは、現在の私である。罪を犯したのは、過去の醜い日本人ばかりではない。過去は現在のうちにしっかりと内在化されている。過去の罪を反省する時、過去と現在の境目はいくつもある。8月15日だけを境界にしてに過去と現在をくぎるのは、もうようそう。日本人は、この日を境に、襖をはたしたわけではない。

ぼくたちは、過去の「とりかえしのつかない罪」を深く自覚することも大切だが、同時に現在の日本と韓国・朝鮮の関係について学ばなければならない。これが、ぼくのとりあえずのささやかな努力目標なのだ。